

東京薬科大学史料館

Archives, Tokyo University of Pharmacy and Life Sciences



東京薬科大学学祖
藤田正方先生



東京薬科大学史料館編

Tokyo University of
Pharmacy and Life Sciences
since 1880

東京薬科大学史料館

東京薬科大学は、1880年藤田正方先生により創設されたわが国最古の歴史を誇る私立薬系大学です。

「東京薬科大学史料館」は本学の礎を築き、発展に尽力された創立者藤田正方先生をはじめ歴代の関係者の史料等本学のこれまでの歩みを展示しています。本学の歴史は我が国の薬学の歴史とも重なるため、本史料館では薬学や薬剤師、薬に関連する史料も併せて収集、展示を行っています。



昭和9年頃 東京薬学専門学校
女子部実習風景



昭和33年 東京薬科大学
男子部実習風景

目次

東京薬科大学の歩み	
東京薬舗学校創立時	… 1
藤田正方年表	… 3
学校等略歴年表	… 4
東京薬学専門学校創立と先人の功績	… 6
引き継がれる建学の精神・東京薬科大学の変遷	… 7
人物略歴	… 8
史料館配置図	… 9

表紙の説明 「丹波敬三の墨跡*」

東京薬学専門学校の初代校長に就任した丹波敬三は、平安時代から続く名門医家の血統。「淡齋」と号し、書をよくした。展示品はその一つで、長寿を祈念し祝う「延寿萬(万)歳」の成語が書かれる。

右の朱印(関防印)には「醍醐味」とあり、「正三位勲一等薬学博士丹波敬三書」と署したあと「丹波敬三」「淡齋老人」の落款印がある。

(*墨跡(ぼくせき)：紙や布に墨書された肉筆、書跡・筆跡ともいう)



東京薬科大学の歩み

東京薬舗学校創立時

東京薬科大学の前身である私立東京薬舗学校は1880年（明治13年）に丸岡藩（現福井県である越前国を支配した藩）の御殿医であった藤田正方先生により創設されました。本年度で137年の歴史を誇る我が国最古の私立薬系大学である由縁です。明治の時代の若者は凄まじい志とそれを実行するエネルギーに溢れていましたが、藤田もその例外ではなく、この学校を創立されたのは34歳の時のことです。藤田が薬舗学校の創設を考えた真の理由は東京府知事あての「私立東京薬舗学校開業上申書」からうかがうしか術がありませんが、医師であった藤田はこの年齢までにすでに医師とは別に薬の専門家が必要であると考え、無から実学本意の薬舗主養成（薬剤師教育）の実現のため、複数の同志と共に学校創設に奔走し初代校長を務めました。陸軍軍医総監であった石黒忠恵や当初薬局から始まった現資生堂創業者の福原有信なども、学校創立の支援者として記録に残されています。当時、薬の専門家の養成機関は金沢医学館薬学科（1874年創設、のち廃校）と東京大学医学校製薬学科（1878年創設）しかなく、薬舗主（今の薬剤師）の養成を意図した東京薬舗学校の創設は、その意味でかなりの独創性と将来の日本における必要性を見据えた先駆的な行動であったことが推察されます。私学は建学の精神によりそれぞれの独自性がありますが、本学の教育にもこれがはっきり反映されてきました。

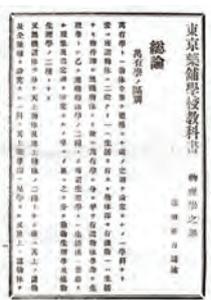
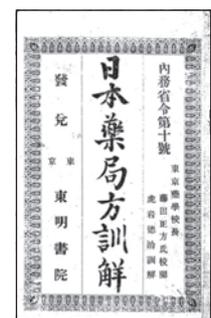
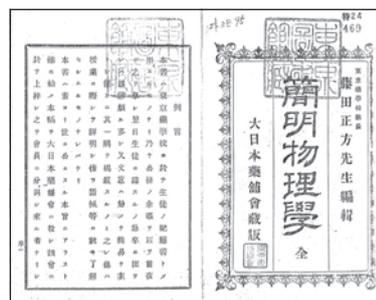
藤田は1846年（弘化3年）に生まれ1868年（明治元年）に東京大学医学部の前身である医学所に入学しています。医学所は医学校を経て1869年には大学東校（初代校長・佐藤尚中、順天堂の創設者）に、また1872年には第一大学区医学校に改称されていますが、藤田は大学東校を1871年に卒業し、同校や第一大学区医学校で後進の指導にあたっています。第一大学区医学校はさらに東京医学校に改称されますが、本学の創設に関わった下山順一郎（私立薬学校初代校長・生薬学）や丹波敬三（私立薬学校監督、薬品鑑定）は同校に作られた製薬学科の第一回生に、またこれに前後して森鷗外（林太郎）や細菌学者となった北里柴三郎も同医学校に入學しており、凄まじいエネルギーが渦巻いていた明治のこの時代の医学や薬学、公衆衛生を作り上げていった俊英たちは藤田と同じ学統の延長線上にあることがわかります。東京薬舗学校が創立された同じ1880年には日本薬学会の前身である東京薬学会が創立されており、学問としての薬学の充実のための研究活動の重要性も認識され始めた時期に薬舗学校も創設されていることから、本学の歩みは薬学の歴史とも重なることがわかります。藤田は私立東京薬舗学校の創立からわずか6年後の1886年（明治19年）にコレラに感染し急逝しています。その当時流行したコレラ患者の治療に医師



若き日の藤田正方先生

として関わり自らの命を落とす結果となったのでしょうか、あまりにも早い旅立ちであり駆け足で走り抜けた40年に満たない人生でした。昨年は藤田の没後130年の年でした。もっと長く生きていれば藤田はさらに日本の医学・薬学に大きな足跡を残す多くの輝かしい業績を残したものと思われまふ。公衆衛生が充実した現在の日本ではコレラによる死亡はほとんど考えられませんが、当時はまだ衛生状態の極めて悪い時代でした。コレラ菌は結核菌の発見でノーベル医学賞を受賞したローベルト・コッホにより、藤田が亡くなる2年前の1884年に発見されています。医学校を卒業した北里柴三郎は、藤田の亡くなった同じ年にベルリンのコッホのもとに留学して、破傷風菌の純粋培養の成功に続き破傷風抗毒素の発見という感染症の制御に革命的な世界的大発見を1890年に成し遂げています。その後北里は日本に帰国し我が国の公衆衛生を大きく向上させましたが、北里によるこの発見と藤田のコレラ感染が時期的に逆転していたら、藤田はコレラにより倒れることはなかったかもしれません。

藤田は東京薬舗学校で何を教えていたのでしょうか？ 当時は製薬のための教育が重要であったのか、薬舗学校の創立よりさかのぼること7年前の明治6年にはアメリカ人のカッケンボスの物理学教科書 Natural Philosophy が藤田の翻訳により『理学新論』上、下巻として出版されています。また藤田が亡くなる2年前の1884年には東京薬舗学校校長 藤田正方著による『簡明物理学』の教科書が物理装置の図なども入った教科書として出版されており、翻訳書とあわせ国立国会図書館に保管されています。もとより物理学は蘭学として天文学や数学などとともに国外の書物の翻訳書により我が国に導入されたことが伺われますが、この書物は少なくとも物理学という呼び方の最初のころの1冊のようです。また藤田が東京薬舗学校で行った物理学の講義の講述書（当時の持ち主である薬舗学校生の署名が入った和装本）も見つかっており、藤田による当時の教育を知ることのできる貴重な史料です。このほか、藤田は大学東校卒業の1年後には計算法や単位換算法などについての『筆算知方』を、薬舗学校開設の年には『東京府病院薬局法』（1880年）を、また逝去のわずか17日前には日本薬局方の初版の薬舗主向けの解説書として『日本薬局方訓解』（1881年）を出版しています。最初の『日本薬局方』は翌年に内務省より公布されているので、この解説書の果たした役割は大きなものであったことが想像されます。藤田が医師でありながら薬学の基礎から臨床までの幅広い学識のもと、短期間のうちに多くの重要な書物を出版されていることに驚かされます。「東京府病院薬局法」は史料館で公開しています。





創立者 藤田正方年表・著作物等

1846年 弘化3年 9月12日
越前国丸岡谷町に生まれる

1868年 明治元年 22歳
医学校入学
(当時名称は医学所)

1871年 明治4年 25歳
大学東校を卒業し
後身の指導にあたる

1872年 明治5年 26歳
第一大学区医学校にて
後進の指導にあたる

1873年 明治6年 27歳

1880年 明治13年 34歳
私立東京薬舗学校創設

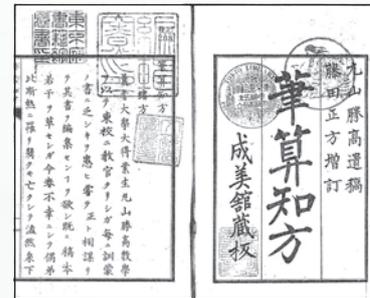
1884年 明治17年 38歳

1886年 明治19年 39歳 (9月9日)
コレラにより急逝

医学生時代

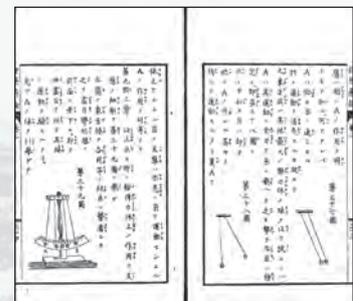
医師・教員時代

東京薬舗学校初代校長時代



筆算知方

理学新論1巻・2巻 (訳書)



東京府病院薬局法

新纂医用化学上編 (訳書)

簡明物理学

日本薬局方訓解 8月23日 (出版日)

学校等略歴年表

1861 ● 文久元年
医学所創立 (東京大学医学部の前身)

1868 ● 明治元年
藤田正方 医学校入学

1870 ● 明治3年
大学東校に改称 (初代校長：佐藤尚中)

1871 ● 明治4年
長井長義 第一回国費留学生としてドイツ留学
藤田正方 大学東校卒業し、後進の指導にあたる

1872 ● 明治5年
第一大学区医学校に改称 藤田正方 第一大学区医学校にて後進の指導にあたる

1873 ● 明治6年
森鷗外(林太郎) 医学校入学
大井玄洞 大学区学校にて文部省上等出仕としてドイツ語通訳
下山順一郎 医学校製薬学科入学
丹波敬三 医学校製薬学科入学

1874 ● 明治7年
東京医学校に改称

1875 ● 明治8年
北里柴三郎 医学校入学 (1875年)

1877 ● 明治10年
東京医学校と東京開成学校(大学南校)との統合により旧東京大学医学部設立
下山順一郎 医学校製薬学科卒業 (1878年)
丹波敬三 医学校製薬学科卒業 (1878年)

1880 ● 明治13年
日本薬学会の前身の東京薬学会創立
私立東京薬舗学校創設 (初代校長：藤田正方) (東京薬科大学の前身)

1883 ● 明治16年
北里柴三郎 医学校卒業
私立東京薬舗学校が東京薬学校に改称
下山順一郎 ドイツ留学
丹波敬三 ドイツ留学 (森鷗外と同じ留学生メンバー) (1884年)

1884 ● 明治17年
ローベルト・コッホ コレラ菌の発見 (1884年)
長井長義(東京薬学校顧問) エフェドリンの発見 (1885年)
藤田正方 コレラにより急逝
大井玄洞、山田 薫、熊沢善庵が交替で東京薬学校の校長を務める

1886 ● 明治19年

1888 ● 明治21年
北里柴三郎 コッホの下に留学 (1886~1891年)
破傷風菌の純粋培養に成功 (1889年)
破傷風抗毒素の発見 (1890年)
東京薬学校と薬学講習所が合併し、**私立薬学校を設立 (初代校長：下山順一郎)**

1893 ● 明治26年
日本薬剤師会設立 (1893年)

1900 ● 明治33年
秦 佐八郎 サルバルサンの発明 (1909年)
私立薬学校が私立東京薬学校に改称
丹波敬三 サルバルサンの国産化に成功 (タンバルサン) (1915年)

1914 ● 大正3年
北里柴三郎 北里研究所創立 (1914年)

1917 ● 大正6年
私立東京薬学校より**東京薬学専門学校設立 (初代校長：丹波敬三)**

1927 ● 昭和2年 (二代校長：池口慶三)

1949 ● 昭和24年
東京薬学専門学校、東京薬学専門学校女子部を併せ、**東京薬科大学 (男子部、女子部) 認可 (初代校長：村山義温)**

1993 ● 平成5年
生命科学部設置認可

2016
藤田正方 生誕 170年



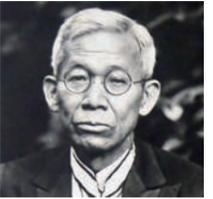
藤田正方 (1846-1886)
私立東京薬舗学校校長
(東京薬科大学学祖)



下山順一郎 (1853-1912)
私立薬学校初代校長



丹波敬三 (1854-1927)
東京薬学専門学校初代校長



池口慶三 (1867-1933)
東京薬学専門学校二代校長



村山義温 (1883-1980)
東京薬科大学初代校長



東京薬学校校舎 (明治)



東京薬学専門学校校舎 (大正)



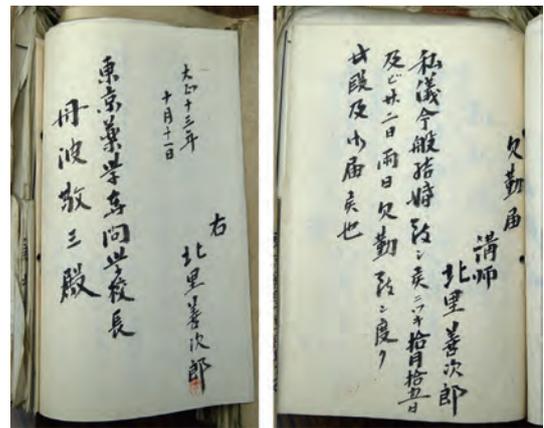
下山校長時代の私立薬学校第一回卒業式(明治22年6月)
(前列は教員。左から平野一貫、大井玄洞、丹波敬三、下山順一郎、柴山正秀、国友保民、小林九一)



藤田正方が東京府知事に提出した東京薬舗学校開業上申書

東京薬学専門学校創立と先人の功績

1883年に私立東京薬舗学校は東京薬学校に改称されますが、1885年に麻黄よりエフェドリンを発見した長井長義（日本薬学会初代会頭）をのちに私立東京薬学校の顧問に迎えています。東京薬学校は藤田の亡き後を大井玄洞、山田 薫、熊沢善庵が交替で校長を務めながらこの学校の存続が守られました。その後、薬学講習所との合併後、1888年に私立薬学校が設立され下山順一郎が初代校長を務めます。下山は帝国大学医科大学（現東京大学医学部）の生薬学講座の初代教授として生薬学の基礎を作り、また我が国の薬学博士の第1号ともなっています。1893年には日本薬剤師会が設立され下山はその第2代会長も務めており、本学の歩みとともに我が国の薬剤師の歴史が刻まれたことも疑いありません。私立薬学校はさらに私立東京薬学校への改称を経て、下山の没後1917年には東京薬学専門学校が設立され、丹波敬三が初代校長を務めます。丹波は平安時代に我が国最初の医学書である「医心方」を編纂した渡来人の丹波康頼の子孫にあたり、東京大学薬学科の教授も務めています。北里柴三郎の門下生であった秦 佐八郎は最初の化学療法剤である梅毒の特効薬、サルバルサンをエールリッヒのもとで発明していますが、丹波敬三はこのサルバルサンの国産化に成功しています。丹波校長の時代には北里柴三郎の次男でサポニンの構造研究などで帝国学士院賞も受けた化学者で、北里研究所所長も務めた北里善次郎が若き日に本学の教員であったことも最近史料から明らかにされています。1927年に丹波は逝去し、池口慶三が二代校長に就任しました。池口は薬剤師の地位向上に尽力し、東薬発展のさらなる地盤を固めました。



丹波校長に提出した
北里善次郎氏の欠勤届



下山順一郎先生



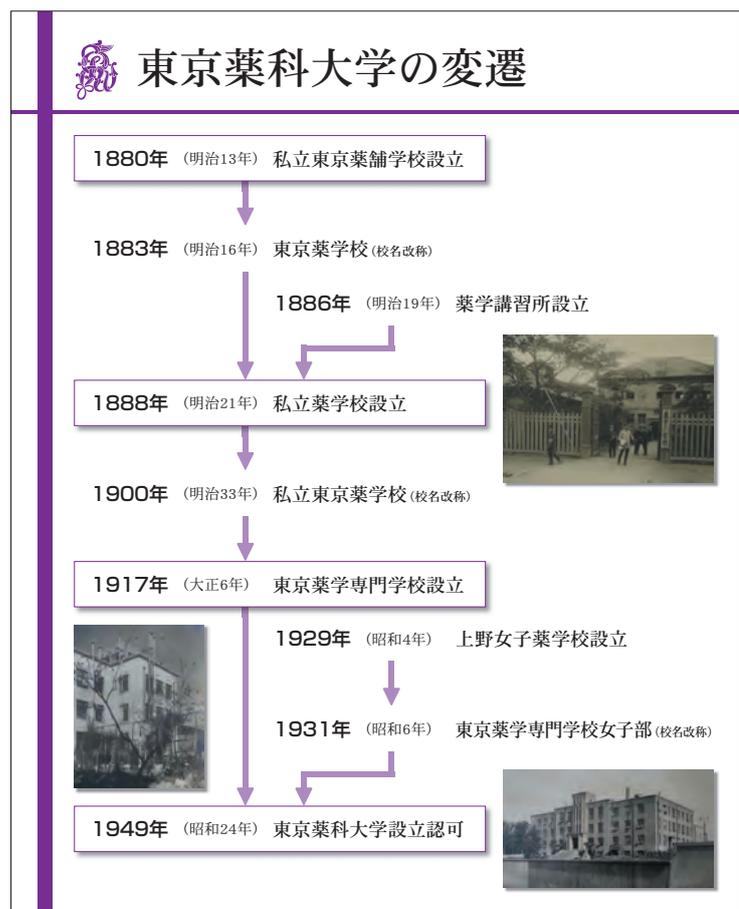
丹波敬三先生



池口慶三先生

引き継がれる建学の精神

戦後の1949年（昭和24年）には東京薬学専門学校と東京薬学専門学校女子部を合わせ現在の東京薬科大学の男子部と女子部となりその設置が認可されました。東京薬科大学はその後も他学に先駆け新たなチャレンジを度々行ってきたことも歴史から学ぶことができます。1965年に東薬大は大学院薬学研究科の博士課程を開設しています。旧帝大の国立大学薬学部を除いて他の国立大薬学部はこの12年後に博士課程が開設されており、東薬大の大学院博士課程の開設が旧帝大薬学部以外の薬学部にも先駆けたものであり、この時代を支えた本学の諸先輩が研究者の養成にも強い関心を有していたことが伺えます。多くの卒業生が国公私立大学や研究所、企業などで優れた研究者として活躍していることがその成果として裏付けられます。一方で東薬大は医療人としての薬剤師の育成についても他学に先駆け医療薬学の専攻科を1976年に開設しています。我が国の薬学部は4年制より6年制への歴史的な転換が図られて11年となりますが本学は40年前にすでにこの時代の到来を考え、この専攻科を通じ医療薬学分野で活躍する人材の育成も図るなど多くの先駆的なチャレンジを行ってきました。また1993年には我が国初の生命科学部を設置することで、薬学と生命科学分野の融合と連携を意図した新たなチャレンジも他学に先駆け行っています。創立からこれまでの本学の歴史を、将来を担う学生や若い教員が知ることで誇りを持ち、積極的に社会で新たなチャレンジを行っていく精神を伝えていくことも大切であり、その一端の役割を史料館が担えれば幸いと思います。この史料館には本学の創設者に関わる史料、卒業生の活躍を示す史料だけでなく、本学の歩みが薬学や薬剤師の歴史とも重なることから薬学や薬剤師、薬業などに関する史料も収集し、我が国の薬学史料館の役割も果たせればと願います。各々のご協力をお願いする次第です。



参考文献

- 東京薬科大学九十年 東京薬科大学九十年編集委員会編 1970年
- 東京薬科大学百年 一九十年以降一 「東京薬科大学百年」編纂特別委員会編 1980年
- 東京薬科大学百三十年 東京薬科大学百三十年編集委員会編 2011年

藤田 正方 (1846-1886)

弘化3年9月12日、越前国(福井県)丸岡谷町(福井県北部)の旧丸岡藩医藤田正中の長男として生まれる。幼年時代に藩校で漢学を修め、17歳の時には金沢の蘭方大家 黒川良安の門に入り蘭学修業に励み、翻訳筆記方を命ぜられた。

明治元年(1868年)9月、22歳で医学所(東京大学医学部の前身)に入学。英医ウイリス、蘭医ボードインに師事し西洋医薬学を学び、抜群の成績で卒業。卒業後は大学東校において、後身の指導にあたった。

明治4年、ミュルレル、ホフマン両師についてドイツ医学を学び、文部十三等出仕・権少教授を命ぜられる。その後、大学を辞して明治5年1月に神田松永町で医院を開業した。

その後も、第一大学区医学校製薬学校で明治6年3月まで後身の指導を行った。明治7年5月、東京府病院医師及び附属医学校生徒教授兼務。明治11年頃より薬舗開業試験受験者の予備教育を開始。明治13年に「東京府病院薬局方」を出版し、欧米の薬局および英独の医学者の処方を取載、この種の薬局方の先鞭をつけた。この経験をもとに明治13年本学の前身である東京薬舗学校を創設、校長に就任する。明治19年1月には官を辞し専ら校務にあたり、同年4月に東京薬学校附属試薬所を設置。私設衛生試験の初の試みに成功して、衛生知識普及向上に貢献した。

明治19年9月9日、猛威をふるったコレラに冒され急逝。享年39歳。谷中天王寺霊園に永眠。

下山 順一郎 (1853-1912)

嘉永6年2月18日、尾張国(愛知県)犬山の藩校教授下山健治の長男として生まれる。藩校切っの秀才で明治3年犬山藩から抜擢され、政府の指導者養成機関である大学南校(現東京大学の前身)に入学、外国人からドイツ語の理化学を学ぶ。明治6年、第一大学区医学校に新設された製薬学教場(現東大薬学部の前身)に転学して5年間、外国人教師の指導を受ける。

明治11年3月、首席で卒業。丹波敬三らと母校に残り、別課の指導にあたる。明治16年、官命で最初の薬学研究のためドイツ留学。帰国後、明治20年4月に東京帝国大学医科大学薬学科生薬学講座初代教授となり、生薬学の基礎を確立した。明治21年私立薬学校(後の東京薬学校、現東京薬科大学)の初代校長に就任。明治32年、丹波敬三らと共に我が国最初の薬学博士を授与される。

晩年は懇請されて日本薬剤師会会長に就任し、薬剤師の地位向上、業権確立に尽力され、多方面に幾多の功績を遺し、明治45年2月12日永眠。享年58歳。従三位勲二等、旭日重光章を授与される。

丹波 敬三 (1854-1927)

安政元年1月28日、摂津国八部群走井村(現神戸市元町)の蘭方医丹波元礼の三男として生まれる。日本現存最古の医学全書「医心方」を編纂した丹波康頼の末裔。

少年時代、蘭方及び化学を学び、明治5年に第一大学区医学校に入学する。翌6年、医学校に新設された製薬学教場(現東大薬学部の前身)に転学し5年間外国人教師の指導を受ける。

明治11年3月卒業と同時に同期の下山教授らと母校に残り後身の指導にあたる。明治17年、下山順一郎を追ってドイツに留学。帰国後東京帝国大学医科大学薬学科教授に就任し、衛生・裁判化学を担当する。

翌21年下山順一郎と協力して私立薬学校を創設。明治32年、下山順一郎らと共に我が国最初の薬学博士を授与される。明治45年、下山校長亡き後校長に就任して、東京薬学専門学校(後の東京薬科大学)を大正6年(1917年)に設立し初代校長に就任。日本薬学会副会長、日本薬剤師会会長にも就任。サルバルサンの国産化研究等、近代薬学の基礎を築き、昭和2年10月19日永眠。享年73歳。正三位勲一等瑞宝章を授与される。

東京薬科大学史料館

東京薬科大学の前身である 私立東京薬舗学校の創立者 藤田正方先生の功績



藤田正方先生は1846年に生まれ、1868年に東京大学医学部の前身である医学学校に入學しました。そして私立東京薬舗学校を前編34歳の時に創立しました。

英醫學校の前身であり、そのころの藤田先生は1873年にドイツ人のカッテンボスの物理学教科書Natural Philosophyが藤田正方先生の翻訳により「理学新論(1,2巻)」として出版されています。また藤田正方先生が亡くなる2年前の1884年には「簡明物理学」と称し物理装置の図なども入った教科書として出版しています。この他にも「算算知方」、「東京府病院薬局法」などにも関わり、ユラユラに過去にされる所が「日本」は「日本製局方調劑」を出版しており、医師で明治の薬学の歴史から藤田先生までの軌跡や学識のふと、短期間のうちに多くの重要な著作を出版されていることがわかります。

1868年 創立者として
1868年 創立者として
1871年 創立者として
1872年 創立者として
1873年 創立者として
1880年 創立者として
1884年 創立者として
1888年 創立者として

藤田正方先生の著作物の出版年

算算知方 英蘭辞書第1巻の日本語訳を藤田先生が担当した。	理学新論 1巻・2巻 ドイツ人のカッテンボスの物理学教科書Natural Philosophyの翻訳により出版された。	東京府病院薬局法 藤田先生自身が編纂された。病院薬剤師のハンドブック。	新編医用化学(上編) ペトリオの化学を参考として、藤田先生自身が編纂した。	簡明物理学 物理学の初歩を教えるための教科書。藤田先生自身が編纂している。	日本薬局方調劑 藤田先生自身が編纂した。日本薬局方の調劑の標準。	東京薬舗学校教科書 物理学の部(明治薬学塾) 藤田先生自身が編纂した。
--	---	---	---	---	--	---



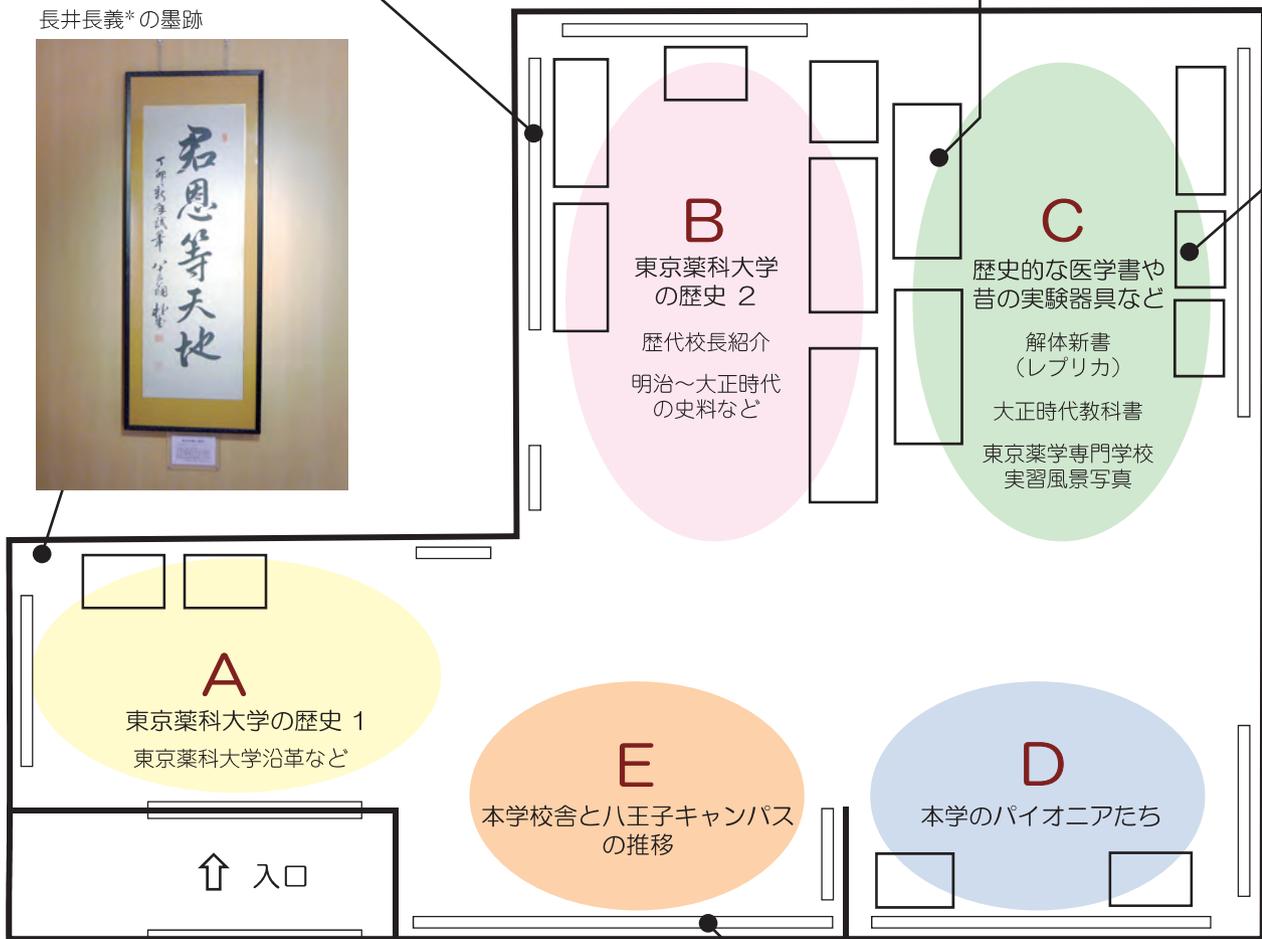
顕微鏡(ドイツ製)
(明治後期~大正時代のもの)



池口慶之 纂著
教科書
(1916年発行)

本冊子で紹介している藤田正方先生の著作等を展示しています

長井長義*の墨跡



(展示品は変更になる場合があります)

* 長井長義 (1845~1929)

1871年第1回国費留学生としてドイツに留学、日本薬学の父と称される。ドイツ留学から帰国後、麻黄からエフェドリンを抽出するなど、薬学の発展に貢献。日本薬学会の初代会頭を務め、本校の発展に顧問として大いに尽力した。展示品は没する2年前の筆。「君が恩は天地に等し。丁卯(1927)新年試筆、八十三翁朴堂」とあり、落款(印)には「家山在青」「理学博士薬学博士長井長義」「樸堂」と刻されている。





藤田正方先生の碑

東京薬科大学史料館



利用案内

- 開館日：月曜日～金曜日(大学休校日は休館)
 - 開館時間：9：00～16：00
 - 入館料：無料
 - 場 所：学生会館(入試課隣)
- ※団体でお越しの際は事前にご連絡ください

史料提供のお願い

本学や薬学・薬剤師・薬の歴史に関する史料を集めています。
ご提供いただいた貴重な史料は、大学で責任をもって保管し随時展示させていただきます。

東京薬科大学史料館

〒192-0392 東京都八王子市堀之内 1432-1 東京薬科大学

TEL：042-676-5111(代)

TEL：042-676-5261(史料館事務局)

E-mail: gakumukikaku@toyaku.ac.jp

<http://archives.toyaku.ac.jp/>